2020 年 1 月 29 日

博士学位論文審査要旨

申請者：沈（しん）　雨香（うひゃん）（早稲田大学 教育・総合科学学術院 助手）

論文題目：What is Higher Education for?: Educational Aspirations and Career Prospects of Women in the Arab Gulf

申請学位：博士（教育学）

審査員：

主査：吉田　文　　早稲田大学教育・総合科学学術院教授　博士（教育学）東京大学

副査：小林　敦子　　早稲田大学教育・総合科学学術院教授　博士（教育学）早稲田大学

副査：Gray, Matthew　早稲田大学国際教養学術院教授　博士（Political Science and Government）The Australian National University

副査：辻上　奈美江　上智大学総合グローバル学部准教授　博士（学術）神戸大学

1. 本研究の目的

本研究の目的は、GCC（Gulf Cooperation Council）を構成する 6 ヵ国（バーレーン、クウェート、カタール、オマーン、サウジアラビア、UAE）に居住する、10 代後半から 20 代の女性が、どのような教育アスピレーションをもち、その後の労働参加にどのような展望をもっているかに関して、アンケート調査とインタビュー調査とから、実証的に明らかにすることにある。

なぜ、このような研究の実施に至ったかについて、これまでの教育社会学の領域での研究について簡単に触れておきたい。先進諸国は言うに及ばず、多くの発展途上国においても、教育は社会の発展や経済成長の手段としての位置づけを付与されたため、教育の利用者は、より高い社会的地位を獲得するために、教育を自身の社会移動の手段として利用するという社会現象をみることができる。したがって、教育は社会的地位獲得という目的のための手段という枠組みでもって多くの研究が蓄積されてきた。これは、とくに近年においては男子のみならず女子でも同様の枠組みの適用が可能になり、女子の高等教育進学率の上昇は女子の労働参加率の上昇と就業の長期化をもたらしていることが明らかにされており、このことは半ば通説となっている。

ところで、研究対象の GCC 諸国は、近代高等教育の導入は 1960 年前後からであり、女子の高等教育進学が始まったのは 1990 年代後半からと遅い。それにもかかわらず、女子の

高等教育進学率は急上昇し、6 ヵ国のうち低い国でも 50%強、高い国では 70%を超えており、すでに男子のそれを大幅に上回っている。また、女子高等教育進学者のうち、STEM を専攻する者が人文系を専攻する者を凌駕しており、いわゆる女子向きの進路選択者が少ないことは、多くの先進諸国や発展途上国にはみられない社会現象である。

他方で、女子の労働参加率は低いままであり、6 ヵ国中、高いところでも 50%程度、低いところではわずか 20%である。これは、世界のなかでもっとも低い部類に属する。これまでの研究では、女子の場合、高等教育進学率の上昇が労働参加率の上昇をもたらし、両者の結びつきは強いということが明らかにされてきたが、そうした知見が適用できない地域なのである。

男子を上回る高等教育進学率、男子を上回る STEM 選択者がいるにもかかわらず、なぜ、当該地域の女子の労働参加率は低いのか。これまで、その問題については、主に、女性労働に関する法的な制限、社会的・文化的な障害という観点から論じられてきた。しかしながら、そうだとすると、将来の就業の展望がないにもかかわらず、なぜ、女性は高等教育へ進学するのか。この点は、これまでの研究における議論の延長で解釈することができない。

このギャップを解き明かすためには、当該地域の若年女性にアプローチし、彼女たちがなぜ高等教育へ進学するのか、その後、就業できないのか、しないのかなどのアスピレーションを分析の俎上にのせて解明することが必要であり、本論文の目的はそこにある。

2. 本論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。

Acknowledgments 10

List of Tables 12

List of Figures 14

Chapter 1: Introduction 15

Chapter 2: The Context of GCC Society: Overview of Demographic, Economic, Labor, Social Structures and Education Systems 28

2.1 Introduction 28

2.2 GCC Country Profiles 29

2.3 Demographic Structure 33

2.4 The Economic Outlook 38

2.5 Labor Market and Society 42

2.6 Education Systems 47

Chapter 3: The Context of Gulf Female Education: Prompts, Sources, and Debates in the Literature

61
3.1 Introduction 61
3.2 Women and Higher Education in the GCC 61
3.3 Discrepancy Between Educational and Labor Outcomes, and Debates 70
3.4 Sociological Explanations on Higher Education Expansion and Educational Aspiration 88
Chapter 4: Research Methodology 92
4.1 Introduction 92
4.2 Methodological Approach 92
4.3 Research Design 95
4.4 Data Collection: Methods, Instruments and Ethical Considerations 98
4.5 Data Analysis and Sample Characteristics 106
Chapter 5: Career Prospects of GCC women: To Work or Not to Work 117
5.1 Introduction 117
5.2 Career Aspirations and Career Self-Efficacy 118
5.3 What Prevent GCC women from Planning and Pursuing a Future Career 129
5.4 Working for Self-Contentment 141
Chapter 6: Educational Aspiration of GCC women: The Road to Becoming a *Doctora* 152
6.1 Introduction 152
6.2 Desire to Get an Advanced Degree 153
6.3 Educational Motivations 161
6.4 Doctorate for Personal Growth? 172
Chapter 7: Conclusions 183
7.1 Introduction 183
7.2 Career Aspiration Beyond Socio-Economical Attainment 184
7.3 Educational Aspiration and the Meaning of *Doctora* in the GCC Society 188
7.4 Implications of the Study 190
7.5 Some Final Caveats for Future Research 193
Bibliography 195
Appendix A 214
Appendix B 233

3. 各章の概要

Chapter 1: Introduction

GCC 諸国の女性の高い進学率にもかかわらず低い労働参加率に関して、女性労働に関するイスラム社会の法的な制限、社会的・文化的な障害という観点から論じる研究が多いが、これまでの研究では、以下の 2 点についての言及がなされていない。第 1 は、職業に就き

たいが就けないという失業と、職業に就く意思がなく求職をしないことによる失業とを混同して失業として扱ってきたことである。第 2 は、高い高等教育進学率を労働参加の手段として考えることを、当然視してきたことである。

この背後には、第 1 に、たとえ高等教育を受けたとしても、職業に就く意志がない、職業に就かないことを選択する女性がいるのではないかという仮説があり、第 2 には、教育に対して、労働の手段ではない側面を見出す者がいるのではないかという仮説がある。これらの仮説には、西欧社会をベースにして生み出されてきた理論、社会構造や文化から説明する方式の妥当性を問うという狙いが隠されている。

こうした仮説や狙いを検討するためには、若年女性がなぜ高等教育に進学し、その後のキャリアをどのように展望しているのか、彼女たちのアスピレーションを詳細に解き明かすことが必要になる。アンケート調査とインタビュー調査による混合研究法をとるのはそのためである。

Chapter 2: The Context of GCC Society: Overview of Demographic, Economic, Labor, Social Structures and Education Systems

GCC 社会の人口構造、経済、労働、社会構造、教育システムなど、分析結果を解釈するにあたって必要な社会構造の特徴について、各種の統計データを用いての国別の記述である。GCC（Gulf Cooperation Council）は、1981 年に設立された 6 ヵ国間の防衛、経済などの調整、統合、連携のための協力機構である。

これら 6 ヵ国の社会をまとめていえば、いずれの国も豊富な石油資源によるレンティア国家であり、外国人の出稼ぎ労働者（主に男性）が 40%から 90%を占めている。社会の最上層には、GCC 諸国の国籍をもつアラブ系が主に政府部門で働き、その下層には、専門職に従事する西欧系あるいはアラブ系の者が位置づく。それより下層は外国人労働者であるが、まず、インド、フィリピンからの労働者が一般的な労働に従事し、最下層にはパキスタン、バングラディッシュ、ネパールなどからの労働者が単純労働、肉体労働に従事するという社会構造がある。

教育に関して言えば、教育システムは欧米や日本などと類似しており、6 歳から 6 年間の初等教育、12 歳から 3 年間の前期中等教育、15 歳から 3 年間の後期中等教育、18 歳から 4 年間の大学となっている。後期中等教育までの就学率はほぼ男女差はなく 100%である。高等教育への進学にあたっては、後期中等教育修了試験の成績がベースにあり、加えて英語の試験（TOEFL、IELTS）の成績が重視される。男女平均の進学率は、2016 年でサウジアラビアの 67%からカタールの 15%まで差はあるが、いずれも女子が男子を上回る。

Chapter 3: The Context of Gulf Female Education: Prompts, Sources, and Debates in the Literature

GCC 諸国は男女別学であり、女子の高等教育は男子より 30 年ほど遅れて 1990 年代後半

に本格的に始まったが、その後の進捗は著しい。たとえば、UAE では 2016/17 年度に高等教育機関に在学する男子は 11,166 人、他方、女子は 31,962 人と女子は男子の約 3 倍、しかも、男女の在籍者数をみるとほぼどの分野でも女子が多い。とりわけ男女差が大きいのは、教育 1：1,515（男子：女子、以下同様）、科学 31：630、環境健康科学 170：1,772、食物・農業 23：332、コミュニケーション・メディア科学 259：2,307、人文・社会科学 269：3,949 などであり、理系分野が多く含まれていることを特徴とする。

労働参加に関しては、職業に就きたいが就くことができない、求職中の失業という意味での失業率は多くても 5%程度であり、労働にできない構造的な障害があるわけではないようだ。しかしながら、GCC のどの国でも、就業している女子の比率よりも就業の意志がない女子が多く、おおむねその比率は 1：2 となっている。

この教育と労働参加のギャップに関しては、一定の研究の蓄積があるが、多くは高学歴女性が労働市場に参入しないことの説明にさかれている。それらを大別すれば、以下の 4 つにまとめることができる。第 1 は、高等教育で獲得される知識・スキルと労働市場で求められるそれとのギャップに着目するもので、それは、一方で、女性が高学歴であるがゆえに、労働市場には適職がないという説明になり、他方で、高等教育で十分な知識やスキルを獲得していないために、労働市場に参入できないという説明がなされている。第 2 には、社会経済構造の特徴に説明要因を見出す研究であり、それは、一方で、イスラムの伝統や文化に着目して、それが女性の社会進出を阻害しているというもの、他方で、現在の経済構造に着目して、レンティア国家のために、女性が労働市場に出る必要がないという説明がなされている。

これらの研究の問題点は、マクロ統計をもとにした解釈が中心であり、女性自身がなぜ労働市場に参加しないのか、彼女たち自身のアスピレーションにもとづいた分析ではないことにある。

では、当該地域の女性が、なぜ、高等教育を受けるのかという説明に関しては、教育の供給側状況から説明したものと、教育の受容側から説明したものとに大別される。供給側からの説明では、政府の高等教育政策による就学の促進、とくに世銀などによる女性教育を強調したグローバルな開発目標の影響などから説明される。他方で、需要側からの説明としては、結婚との関係で、教育は結婚の猶予や回避に使われているというもの、反対に、国民養成の担い手になるという点で結果的に女性の結婚市場における価値を高めるというものがある。また、教育は、有益な時間の使い方であり、自己充足や自己の向上が得られるという研究もある。

しかしながら、これらの研究は、補足的・解釈的な説明として用いられているに過ぎず、十分なデータにもとづく実証的な研究にはなりえていないという問題がある。

これら先行研究は、GCC 諸国の女性たちの教育アスピレーションとその後のキャリアに関する展望に詳細に分け入ってトータルな説明をするものにはなり得ていない。

そこで、本研究では、これをリサーチ・クエスションとし、なぜ女性は高等教育へ進学

するのか、教育の先にどのようなキャリアを展望するのかを、彼女たちのアスピレーションに迫ることで明らかにする。

Chapter 4: Research Methodology

研究の方法としては、アンケート調査をインタビュー調査による混合研究法を用いた。まず、2016 年 1 月から 10 月にかけてサーベイモンキーを用いて、15 歳から 30 歳の GCC 諸国の国籍を有する女性を対象に、スノーボール・サンプリングにより、アラビア語によるアンケートを実施した。2,573 票の回答を得たが、質問の 50%以上に回答した 1,849 票を有効回答票とした。そこから GCC 国籍を持たない男性票を欠損値とし、1,845 票を分析対象票とした。その内訳は、GCC 国籍をもつ女性が 1,604 票（86.9%）、GCC 国籍をもつ男性が 67 票（3.6%）、GCC 国籍をもたない女性が 174 票（9.4%）である。

このデータ分析の結果をもとに、2016 年 1 月から 2017 年 5 月にかけて、GCC 諸国のうちサウジアラビア以外の 5 ヵ国を数次に分けて訪問し、英語による半構造化インタビューを 24 人に対して実施した。このうち 20 人が GCC 国籍をもつ女性、その他は、UAE で生まれ育ったイエメン女性 1 人、バーレーン男性 1 人、UAE 男性 2 名である。この分析を経て、アンケートの分析結果との照合、統合を行い、本論文の執筆に至った。

分析の枠組みは、アンケート調査、インタビュー調査、どちらも I-P-O（Input-Process-Output）モデルを採用し、Input では、個人属性、高等教育機関への進学理由、教育アスピレーションを中心に、Process では、大学のタイプ、専攻、学習生活、人生の価値観、ジェンダー意識、家族関係を中心に、アウトプットでは、キャリア・アスピレーション、キャリア意識、キャリアへの満足感・充足感、キャリア展望などを中心に構成した。アンケート調査は 41 問、半構造化インタビューは 9 つの大項目のもとに、5 つ前後の具体的な質問を準備した。

Chapter 5: Career Prospects of GCC women: To Work or Not to Work

女性は、なぜ労働市場に参加しないのか。データの分析結果によれば、まず、彼女たちは高等教育修了後の就労に関して、きわめて高い意欲を示しており、また、その目標を達成することにも強い自信を持っていることが明らかになった。労働市場への参加意志がないわけではなく、ましてやイスラム社会の女性に対する抑圧が障害になっているわけでもない。しかしながら、実際には労働参加がなされない理由について、以下の 4 点を新たな知見として提出している。

第 1 に、女性たちの高等教育での専攻とその後に希望するキャリアとの間に大きなミスマッチがあり、希望する職種に見合う学習をしていない。たとえば、経済学を専攻しながら、医師になることを希望しているような事例が頻繁にある。

第 2 に、希望する仕事の労働環境（給与、労働条件、家からの距離）を、職種内容や職業達成よりも重視しており、労働環境が整備されていることが、就労の規定要因になって

いる。したがって、その条件が満たされない場合、あえて就労しないという選択肢もありうる。

第 3 に、GCC 諸国の女性の結婚が不可避性と予測不可能性をもつため、長期にわたるキャリア・プラニングが困難という条件がある。すなわち、当該地域の女性は自身の意志による自由な結婚ができず、親の決定による結婚を受け入れざるを得ない状況に置かれており、また、それがいつ及んでくるか予期しがたく、したがって長期にわたる職業キャリアを見通すことが困難であり、そのことがキャリア展望を阻んでいる。

第 4 に、GCC 諸国の女性の就労は、自身が働きたいから働くという自己満足の側面、労働によって自己を成長させ、それでもって社会貢献ができると考える側面が強く、経済的独立を果たし家族の養育に寄与することは考えていないし、また、その必要もない。

これらの理由で、GCC の女性たちは、長期に働かないという選択をするのである。そして、当該地域では、経済的な生産性の高さは、必ずしも社会的期待に応え社会的評価を得る唯一の方法ではない。家庭をマネジメントし子どもを養育することに価値が置かれ、女性たちもそうした価値観のなかで生きているのである。

Chapter 6: Educational Aspiration of GCC women: The Road to Becoming a *Doctora*

GCC の女性の高等教育進学率は男性よりも高いが、当該地域の女性の高い教育アスピレーションは、大学の学部進学にとどまらず、その後、大学院に進学し博士学位の取得を目指すことにあらわれている。

なぜ、大学院に進学し、さらには‘Doctora’（博士）になることを希望するのか、分析の結果、4 点が明らかになった。

第 1 に、女性たちは、特段の理由がないままに大学に進学しており、そこから、学部進学は後期中等教育修了後に予定されている当然の進路であり、半ば義務教育的に捉えられている。したがって、学部進学は選択肢ではなく、その後の大学院が初めて選択肢となり、それへのアスピレーションを持っているのである。

第 2 に、GCC の女性にとって、高等教育機関は、家族と離れて 1 人で自由を享受できる場であり、かつ、安全な場である。また、教育を受けることの正当性は高いため、生活の一部を過ごす場として高等教育が選択される側面がある。博士課程への進学に関しても、その意味合いは強い。

第 3 に、学部修了後の大学院進学率は男子以上に高いが、それとて労働市場における将来のキャリアを考慮したものではなく、個人的な充足を求めての進学である。彼女たちは、専門的知識を獲得することで、自己を向上させることができるだけでなく、国家や社会に貢献することができると考えている。

第 4 に、博士課程への進学は、結婚・出産の後になるケースが多い。‘Doctora’になったとしても、大学教員や研究者を目指すわけではなく、自らの家庭生活を生産的にマネジメントできるようになる証とみなしている。

総じて高い教育アスピレーションをもつ GCC 諸国の女性たちは、教育によって獲得された専門的知識は、家族を中心とする自らの生活世界を豊かにするものとしてその機能を発揮し、それを通じて社会貢献が可能になると考えているのである。

Chapter 7: Conclusions

これらの分析の結果、GCC 諸国では、女性の高い教育アスピレーションは、労働・経済的達成とリンクしていないことが明らかになった。しかし、これが彼女たちにとって、非合理的なわけではない。彼女たちは、家族のマネジメントの責任者であり、そのことにもっとも大きな価値があり、それを中心に据えたうえで、より高い教育を求め、労働市場に参加しないという選択をする、きわめて合理的な生活世界に生きているのである。

家族のマネジメントという観点を導入することで、高い教育アスピレーションと低い労働参加率をギャップとしてとらえるのではなく、両者はシームレスに連続するものとして理解でき、それが本研究の結論でもある。

高等教育進学率の上昇が労働参加率を上昇させる、教育は社会的地位獲得の手段という理論枠組みでは把握できない社会が、GCC 諸国には展開していることが明らかになった。これは、これまでの欧米を中心として蓄積されてきた研究の枠組みに再考を促すものであり、さらなる研究の展開による新たな理論枠組みの構築が課題である。

4. 総評

GCC 諸国の女性の高等教育進学率は男性を上回るにもかかわらず、労働参加率が低いのはなぜか、というリサーチ・クエスションを立て、IPO モデルを分析枠組みとし、アンケート調査による量的分析とインタビュー調査による質的分析を用いて、それを解明した。

分析の結果、GCC 諸国では、女性の高い教育アスピレーションは、労働・経済的達成とリンクしていない。ただし、彼女たちは、労働市場への参加に関しては強い意欲と自信を示しており、しかしながら、諸条件による働かないという選択をしていることが明らかになった。

では、なぜ労働参加率が低くなるのか。以下の 4 つの理由を見出すことができた。第 1 が専攻と希望職業のミスマッチ、第 2 が労働環境（給与、労働条件、家からの距離）の、職務内容・職業達成以上の重視、第 3 が結婚の不可避性と予測不可能性、第 4 が自己充足としての労働である。

他方で、それにもかかわらず高い教育アスピレーションが維持されている理由としては、以下の 4 つを見出すことができた。第 1 が学部進学の半義務教育化、第 2 が高等教育機関の自由享受の場としての位置づけ、第 3 が、専門的知識獲得による自己充足・社会貢献を求めての大学院進学希望、第 4 が、家族のマネジメント能力の向上の証として、結婚出産後の博士号取得希望である。

高い教育アスピレーションと低い労働参加率は、家族のマネジメントに大きな価値を置

き、その能力向上を求める彼女たちの生活世界に由来するものであり、そう考えるとギャップと見えるこの両者の関係は、家族のマネジメントという役割を介して合理的につながっていることが明らかになった。

こうした分析に対して、審査員からは以下の評価を得た。

第 1 に、全体として、先行研究を充分に渉猟したうえで、それらをもとに明確かつ興味深いリサーチ・クエスションを立て、丁寧な分析を重ね、明快かつ納得性の高い結論を得たという評価を得た。知見のオリジナリティは高く、教育社会学という領域においても、中東研究という領域においても、学問的な貢献は大きく、これをもとに英語の書籍として出版することを薦められた。

第 2 に、高い教育アスピレーションにもかかわらず労働しない選択という、これまでの研究とは矛盾する現象を、GCC 諸国の女性の生活世界を介在させることで合理的な選択という結論を導いたことは大変興味深く、新たな理論枠組みの構築が期待される。

第 3 に、GCC 地域に入って調査研究を行うことは容易ではない。2,500 票を越えるアンケート調査の回答を集めたこと、24 名に対するインタビュー調査を行ったことは、専門の研究者でも多くの困難を伴うものであり、この点でも評価することができる。

他方で、この地域に特有のイスラムという伝統的宗教的要素が、あるいは、レンティア国家という現代の特殊な経済的要因が、彼女たちの教育と労働に関するアスピレーションにいかなる影響を及ぼしているのかに関して、もう少し言及がなされるとよいとの指摘を得た。とくに、家庭生活のマネジメントに価値を置く彼女たちの生活世界を考えるうえで、この 2 つの要素の影響力の有無は検討が求められよう。

また、データ量の制約から本論文では GCC 地域の共通性に着目し、6 ヵ国をまとめた分析を行ったが、国別の違いにも考慮したうえで GCC 地域を論じる必要性があろうとの指摘もなされた。ただ、これらは、いずれも今後の課題であり、さらなる研究の発展に俟つものである。

以上により、審査員一同、総合的に検討した結果、本論文が「博士（教育学）」を授与するのにふさわしいと判断したことをここに報告する。